

左の記事を読んで、下の問いに答えましょう。

1 孤独死の遺体が2月、9月に多く発見される理由を本文中の言葉を使って書きましょう。

2 孤独死の早期発見のための対策を本文中から4つ読み取って書きましょう。

1人暮らしの高齢者が増えている。昭和から平成、令和へと右肩上がりに増え続け、25年後には約1084万世帯(国立社会保障・人口問題研究所の将来推計)となる見通しだ。懸念されるのが、孤独死の増加。どうすればいいのだろうか。

超高齢社会 2025

大阪府内のマンションの一室。住人の高齢男性の遺体が昨年10月ごろ見つかった。この部屋で昨夏亡くなったとみられ、倒れていた場所には黒い染みが残り、異臭が漂う。

「臭いや虫が出て『おかしい』と思っても、付き合いたくないから周りの住民は関わりたくない。半年ぐらい見つけてもらえない方もいます」

特殊清掃や遺品整理を手がける「ベストサーブ」(大阪)代表取締役の工藤敏光さん(56)は、こう説明した。遺体が解剖できないほど腐敗している場合は室内に残された食品の賞味期限などで死亡時期を推測しているという。特殊清掃の仕事のピークは2月と9月。物価高で光熱費

増える孤独死、対策急務

「節約のためエアコンをつけず、耐えきれなくて亡くなる方が結構いる」と工藤敏光さん



を節約したり、高齢で体温調節がうまくできなかったりして亡くなり、遺体が見つかる時期だ。10年前と比べ件数は2倍以上に増えた。警察庁は昨年8月、全国の警察が取り扱った遺体のうち、自宅で死亡していた1人暮らしの人の数を公表。昨年1月から半年間で3万7227人(暫定値)が亡くなり、このうち65歳以上の高齢者が2万8330人で76・1%を占めた。

「1人で住んでいる以上、孤独死は防げない」と工藤さん。そこで必要になるのは、早期発見の仕掛けづくりだという。「照明や電気ポットの使用で安否確認できるサービ

地域の支え 点から面へ

スがある。家族や地域で見守りが難しい場合は、(民間の)見守り訪問サービスもお勧めです」

むろん地域の支えも大切だ。高齢者の社会的孤立を研究する仏教大の新井康友教授は、問題解決の「特效薬」はなく、行政を含め、あの手この手で対面での接触頻度を増やすことが重要だと指摘する。

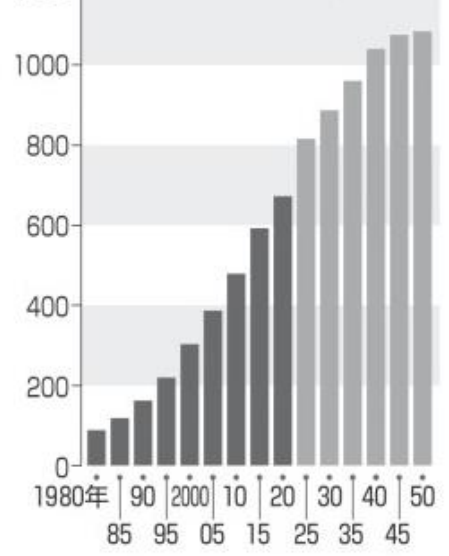
サークル活動に取り組んだり、一緒に食事する場を設けたり。面倒でも自治会費を毎月集めれば顔を合わす機会が増え、異変に気づけるようになる。新井教授は「いろんなものを地域につくって、そのどれかに(孤立している人が)引つかかればいい。点が線になり、面になれば、その地域で安心して暮らせるようになる」と話した。

2025年、団塊の世代が全員75歳以上になり、日本は大きな節目を迎えている。超高齢社会の課題を見つめる。◇原則第2金曜に掲載します。



「社会的孤立をいかに防ぐかが大事」と新井康友教授

1人暮らしの高齢者数の推移
万人、万世帯 ※国勢調査や国立社会保障・人口問題研究所による。20年まで万人、25年以降は万世帯で推計値



NI Eワークシート中～高校

NIEワークシートのこたえ（2025年2月18日公開）

◆ワークシート「孤独死対策(社会)」

2025.2.14 朝刊 12面 解答

- 1 物価高で光熱費を節約したり、高齢で体温調節がうまくできなかったりして亡くなるから（同意可）
- 2
 - 照明や電気ポットの使用で安否確認できるサービスの利用
 - 見守り訪問サービスの利用
 - サークル活動に取り組む
 - 一緒に食事する場を設ける
 - 自治会費を毎月集める（うち4つ 同意可 順不同）